

大宜味村史

# 人と自然編

身近でよく見られる植物



ハルノノゲシ



シマニシキソウ (左) とハマスゲ (右)



シマキツネノボタン



ルリハコベ



シュロガヤツリ



イシクラゲ



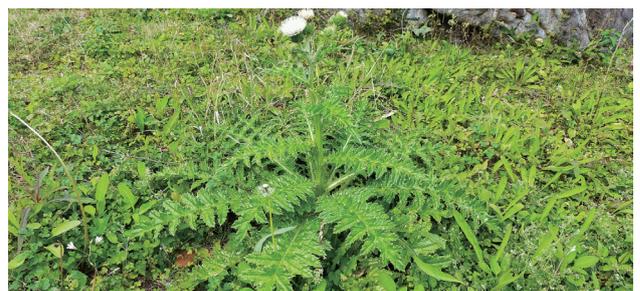
センドングサ



リュウキュウコスミレ (手前)



ムラサキカタバミ



シマアザミ



ヤエムグラ



ジシバリ



カタバミ



フクギ



リュウキュウマツ



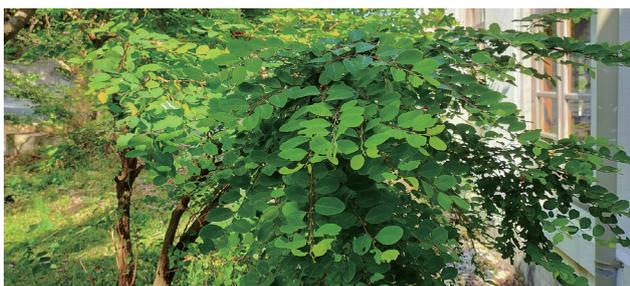
センダン



シークワサー



ネズモチ



オオシマコバンノキ



リュウキュウコクタン

身近でよく見られる植物



イトバショウ



オオイタビ



オオタニワタリ (俗称)



オヒシバ



ゲッキツ



ゲットウ



シマグワ



ソテツ



タマシダ



トウツルモドキ



ツルソバ



テリミノイヌホオズキ



ノアサガオ



ハリツルマサキ



ヒメイタビ



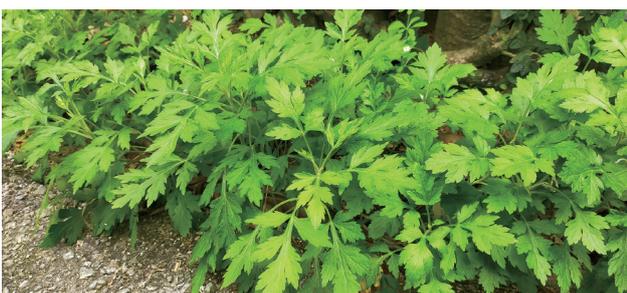
マサキ



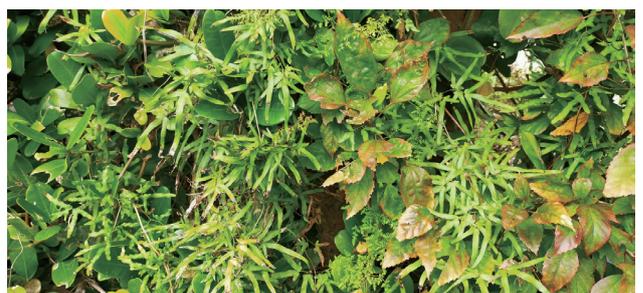
ブツウゲ



ホシダ



ヨモギ



ナガバカニクサ

森や山でよく見られる動物



ヒカゲヘゴ



リュウキュウバライチゴ



マンリョウ



ハシカンボク



クワズイモ



シラタマカズラ



アオノクマタケラン



ツワブキ



リュウキュウイチゴ



ナガミボチョウジ



サクララン



センリョウ



クロツグ



ヨゴレイタチシダ



イタジイ



マテバシイ



オキナワウラジロガシ



ウジルカンダ

海辺でよく見られる植物



スナズル



ツキイゲ



アダン



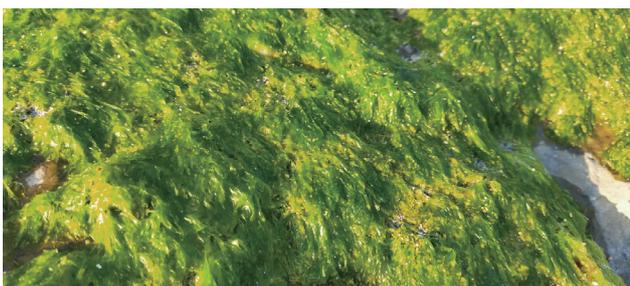
モンパノキ



クサトベラ



モクマオウ



ヒトエグサ (海藻)



アミジグサ (海藻)

## 動物と暮らし

### 村指定文化財（有形文化財）第1号に指定された大宜味村の猪垣（ヤマシシガキ）

大宜味村全域を囲むように喜如嘉～津波まで全長約 31km にわたって構築された猪垣。

【村指定区域】 字押川六田原（前ホテルシャーベイ跡地付近）～根路銘棚原山林間（上原ハキンジョウ）

【村指定距離】 約 1.3km

【猪垣の説明】 大宜味村では猪のことをヤマシシと呼び、猪垣のことをヤマシシガキと称している。私達の先祖は、杣山（現在村有地）と農耕地（畑）との境界に猪垣を築き、畑地へのヤマシシの侵入を防ぎ、畑を守ってきた。芋や作物を失う事は農民の生存に関わることに、長い間、村民をあげて構築、補修を行ってきた。

1776年から1782年にかけて、塩屋、屋古前田、田湊・渡野喜屋・根路銘等の住民が各むらの役人の指揮のもとに、猪垣の大々的な補修工事が行われ、高さ七尺（約 2.3メートル）より四尺（約 1.3メートル）の石垣を完成したところであり農閑期や月夜に石を集めてつんだとも記録されている（『球陽』尚穆王より）。そのため、1605年に野国総官が沖縄に芋苗を持ってきて、作物として定着した頃、初めて猪垣が構築されたと思われる。大宜味村全域を囲い込む猪垣は「十里の長城」とも呼ばれ、構築から改修・保全と大宜味村に住んでいた人々の長い歴史の証しである。

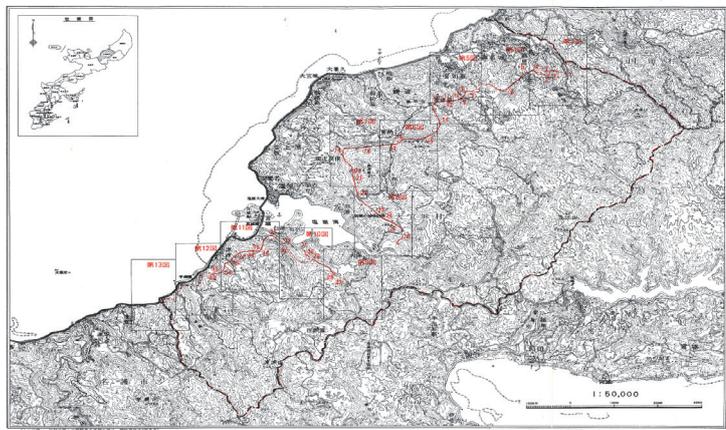
その後も代々の私たちの先祖は、生きるために猪垣を維持し、戦後も村民を最大動員して大宜味村全域を囲い込む猪垣の補修を行ってきた。戦後70年余、今も村有地と個人有地の境界に、その猪垣が残っており、私達村民の先祖の歴史を語ってくれる貴重な文化遺産である。

【現存する猪垣遺構】 大宜味山地の尾根を形成する基層は、①ウロー～田港まで：古生期石灰岩となっており、山頂平坦部では石塁を築く。この石灰岩が露出する一帯の外側（西側）は断層となって岸壁を形成するので、その岸壁を利用し、岸壁の切れ目は石垣を築き連結する。そこは尾根の低地にあたり、猪垣の内側と外側への通行の道が開かれ、石垣に門が作られる。大宜味では垣のことをハキ、門のことをジョウと呼び、田港ハキンジョウ・上原ハキンジョウ・根路銘ハキンジョウ・大宜味ハキンジョウがそれである。②田嘉里～喜如嘉、大保以南：国頭マージ層地帯となっており、斜面を垂直に切り取り段差を設ける斜面を横断する切り土、斜面を横断する外側内側の切り土、掘り切り、土塁を築く。

石塁、土塁、切り土、掘り切り、岸壁によって大宜味間切全域を囲い込む大垣の連続性を確認できるが、猪垣の痕跡を全く残さない箇所は、樹木や竹をもって垣を築いていたと思われる。猪垣はいくら全長が長くても一箇所が崩れるとその用をなさないで、木垣・竹垣のところは絶えず修築しなければならなかった。

#### 記録に残る各字の猪垣

集落名	距離	集落名	距離
田嘉里	2,161	塩屋	5,153
謝名城	1,117	屋古	2,963
喜如嘉	2,118	田港	2,963
饒波	1,072	押川	2,384
大兼久	3,893	大保	904
大宜味	2,063	白浜	265
根路銘	403	宮城	1,425
上原	332	津波	3,608
合計			31,798m



猪垣の位置図（地図を横に拡大）



石塁 (大宜味村の猪垣調査報告書 1994 年)



石塁 (大宜味村の猪垣調査報告書 1994 年)



「切り土」掘り切り状 (大宜味村の猪垣調査報告書 1994 年)



「切り土」垂直断面 (大宜味村の猪垣調査報告書 1994 年)



落とし穴 (口径 100cm 深さ 150cm)  
(大宜味村の猪垣調査報告書 1994 年)



落とし穴 (口径 100cm 深さ 270cm)  
(大宜味村の猪垣調査報告書 1994 年)



猪垣の様子 (2021 年 4 月)



猪垣の様子 (2021 年 4 月)

# 目 次

グラビア

発刊のことば

あいさつ

## 第1章 大宜味村の自然

第1節 大宜味村の地形と地質 .....	3
第2節 大宜味村の植物 .....	11
第3節 大宜味村の動物 .....	28
第4節 大宜味村の自然（総括） .....	54

## 第2章 シマジマの自然と暮らし

はじめに .....	59
第1節 田嘉里 .....	69
第2節 謝名城 .....	99
第3節 喜如嘉 .....	129
第4節 饒波 .....	157
第5節 大兼久 .....	187
第5節 大宜味 .....	219
第7節 根路銘 .....	241
第8節 上原 .....	269
第9節 塩屋 .....	299

第10節	屋古	339
第11節	田港	359
第12節	押川	381
第13節	大保	411
第14節	宮城	435
第15節	江洲	457
第16節	津波	481

### 第3章 自然利用の伝統的知識

第1節	自然利用の景観	517
第2節	動植物の方言および記憶と記録	555
第3節	未来に向けて	561

あとがき	563
索引	565
大宜味村史「人と自然編」執筆者一覧	604

扉写真：夕日を浴びるイタジイの森（大保ダム付近：2006年11月）

が見られ、多様な動物相を支えている。動物群ごとの特徴は以下の通りである。

**哺乳類：**森林性のコウモリ・ネズミ類の大半が奄美・沖縄、琉球列島の固有種である。

沖縄島に棲息する哺乳類のうち、市街地に棲息するアブラコウモリ以外の在来種 10 種と外来種 5 種の計 15 種が確認されている。ケナガネズミやオキナワトゲネズミ、森林性のコウモリ類等、在来種の 10 種はほとんどが沖縄・奄美または琉球列島の固有種で大半が脊梁山地部に棲息する。

しかしながらネズミ類の大半は近年の目撃例は多くはなく、マングースや野ネコ、野イヌ等による捕食で生息状況は懸念される状況である。

**鳥類：**沖縄島の留鳥がほとんど見られ、大半が奄美・沖縄の固有種・亜種である。

1995 年当時では 15 目 41 科 137 種が報告されており、内訳は留鳥が 36 種、夏鳥 5 種、旅・冬鳥 90 種、迷鳥 4 種、帰化種 2 種である（髙原ら,1995）。うち沖縄島で繁殖し年中見ることが出来る留鳥のほとんどが確認されている。

特に沖縄島固有のノグチゲラやアカヒゲ等の森林性の鳥類の生息状況は良好である。ヤンバルクイナは一時、マングースによる捕食で危機的な状況であったが、近年のマングース駆除の成果により回復しつつある。またマングローブ湿地や水田、ダム湖等の水辺環境は多くの渡り鳥の飛来地となっている。

**両生・爬虫類：**沖縄島の在来種のほとんどが棲息、かつ大半が沖縄島、奄美・沖縄の固有種である。

沖縄島で記録のある両生類（カエル・イモリ等）の 5 科 14 種全てが、また爬虫類（カメ・トカゲ・ヘビ等）の 10 科 17 種全てが本村で確認されている。そのうち帰化種や移入種以外は、ほとんどが沖縄島（北部）、奄美・沖縄島および琉球列島の固有種である。その生活域はほとんどが脊梁山地部の森林や溪流である。

**魚類：**固有種は少ないが、南方系の北限種が多く、8 割は海と川を往来する両側回遊魚である。

25 科 55 種（亜種含む）が記録されている。そのうち沖縄島の固有種 1 種（アオバラヨシノボリ）琉球列島の固有種 3 種（リュウキュウアユ、アヤヨシノボリ、ナガノゴリ）固有種は少ないが、琉球列島を北限とする種が 18 種と南方系の種が多いのが特徴である。また 8 割以上の 46 種が一生のうちで“海と川を行き来する”両側回遊魚であるのも大きな特徴である。

**昆虫類：**多様な昆虫相を有し、河川・溪流性の昆虫（トンボ等）に固有種・貴重種が多い。

1995 年当時では 20 目 208 科 1043 種が報告されており、各目別の種数の割合が沖縄県全体のそれと同様なことから、本村における多様な昆虫類の生息環境（山地、河川、農地、集落等）がコンパクトに存在していることを反映している（東,1995）。特に山地の河川・溪流性のトンボ類や水棲昆虫の貴重種や固有種が多いことが特徴的である。

**陸・淡水棲貝類：**約 2 割は沖縄島（北部）の固有種である。

古期石灰岩の広がるネクマチヂ岳周辺を中心に 4 目 22 科 39 属 52 種の陸産貝が確認されている（知念ら,1995）。これらの中にはオキナワムシオイ、リュウキュウギセル等沖縄島（一部北部特有）の固

#### 第4節 大宜味村の自然（総括）

有種等 11 種が含まれる。

本村の動物相は沖縄島、琉球列島の固有種が多く、南方系の種が多い等の特徴が見られる。

大宜味村は面積 63.55km<sup>2</sup>で一村としては大きくはないが、各生物相（出現種）は豊かであり、植物の固有種を始め、動物でも沖縄島や奄美・沖縄の固有種のほとんどが棲息している。これは村内の環境の多様さはもちろんであるが、隣接する東村や国頭村と連続した環境を補完しあい、山原（やんばる）独自の生態系が保全されているからである（新納,1995）。

大宜味村における山頂から川辺・海岸まで連続した植生、そして、それぞれの地質・地形に対応して成林した「多様で連続した森林環境」の保全が、大宜味村および国頭地域の多様で豊かな固有性を有する自然を保護する上の基本である。

#### あとがき

こうした山原（やんばる）独自の生態系の固有性は、他の島々では代替できない固有の生物相であり、世界でも稀な湿潤亜熱帯の島嶼生態系としても価値のある重要な地域である。

そのことが国際的にも評価され、2021年7月26日に国連教育科学文化機関（ユネスコ）により「奄美大島、徳之島、沖縄島北部および西表島」として世界自然遺産に登録された。

特に今回の指定登録は「学術上または保全上顕著な普遍的価値を有する絶滅危惧種の生息地等、生物多様性の生息域内保全に最も重要な自然の生息地を包含する」とする「生物多様性」が評価されたものである。

登録を機に、多くの村民が地元の自然とその特性を理解し、誇りをもって保全・活用に努めたいものである。

#### 〈第4節 安座間安史〉

#### 〈主な参考文献〉

- 東清二（1995）大宜味村の昆虫相. pp323-370. 大宜味村の自然. 大宜味村教育委員会
- 新城和治・新納義馬・新島義龍・宮城朝章・島袋曠・大嶺徹・日越国昭・佐久本徹（1995）大宜味村の植物相. pp197-252. 大宜味村の自然. 大宜味村教育委員会
- 高原建二・安座間安史（1995）大宜味村（沖縄島）の鳥類相とその生息状況について. pp421-514. 大宜味村の自然. 大宜味村教育委員会
- 知念盛俊・治井正一・儀間一恵（1995）大宜味村の陸・淡水棲貝類. pp.295-322. 大宜味村の自然. 大宜味村教育委員会
- 新納義馬（1995）—総括—豊かな生物相の保全のために. pp524-530. 大宜味村の自然. 大宜味村教育委員会
- 西銘盛光（1995）大宜味村の担子菌類. pp.275-294. 大宜味村の自然. 大宜味村教育委員会
- 宮城朝章（1995）大宜味村のコケ植物. pp.253-274. 大宜味村の自然. 大宜味村教育委員会

## 第2章

# シマジマの自然と暮らし



扉写真：塩屋のハーミンジョーからみた宮城島付近（1950年頃）

## はじめに

やんばるの中のやんばるともいえる我が大宜味村では、昔から山と海と川との関わりは常に生活の一部であり、豊かな自然の恵みを享受しながら厳しい暮らしを支えて来た歴史がある。

そこには、自然を理解（認識）し、同時に生活に利用するという、人々と自然との関係が存在する。それらは、動植物の方言として、また、それを利用する知識として、長年の暮らしの中から世代を超えて伝わって来たもので、ある意味では大宜味村の記憶遺産ともいえよう。

しかしながら、人力・荷車及び薪を利用していた生活から、車や電気・ガスを利用する生活に変わり、更に近年の目覚ましい科学の発達により、生活環境が大きく変化するにつれて、これらの記憶遺産も確実に消滅しようとしている。

このような中、本事業においては、「人と自然」の記憶遺産ともいえる動植物の方言とその利用について大宜味村内の悉皆調査を行ない、村の人々の知恵の遺産を次世代に継承することを目的として、準備を入れると約2年の歳月をかけて各字を回り、沢山の村民の皆様からお話をうかがった。

調査内容は、暮らしに関わりのある動植物方言とその利用について、衣食住などに分けて各集落を横断的にまとめた。内容構成については、「沖縄県史 各論編1 第1章 総論 第3節 島に生きる」、西原町史「通史 人と自然との関わり」を参考にした。

調査は概ね和やかな雰囲気で行うことが出来たが、中には緊張のため負担を感じられた方もいらっしゃるかと思います。集中力のいる細かい調査に、最後までお付き合いいただいた話者の皆様には、心よりお礼を申し上げますと共に、先輩方の叡智とバイタリティーに敬意を表します。

なお、方言の音声表記については、『大宜味村史 言語編』で言語編専門部会部会長を務められた新里幸昭氏に監修していただいた。

調査者 大宜味村史人と自然編専門部会

部会長 当山昌直

副部会長 安座間安史

委員 島袋徳正

委員 與儀春樹

大宜味村教育委員会 村史編纂係

係長 藤田元也（2018年）

係長 宮城光一（2019年～）

会計年度任用職員 新城喜代美

会計年度任用職員 河津多恵子

※第2章の執筆は、当山昌直、宮城光一、新城喜代美、河津多恵子があたった。

## 凡 例

1. 本章は、大宜味村の各字における人と自然との関わりについて記録するために、人と自然編各字悉皆調査として、同専門委員により、2018年7月から2020年2月に亘り実施した聞き取り調査の成果を、字ごとにまとめたものである。なお、白浜区については、話者を集めることが叶わなかったため、やむを得ず調査を断念するに至ったことをご了承願いたい。
2. 本調査を実施するにあたっては、各区に調査の趣旨を説明し、字出身者で概ね75才以上の方々を話者として5～6名程度選出していただいた。なお、条件を満たすのが困難な場合は、概ね半生以上当字での生活経験がある人にも参加を求めた。また、会場には毎回、各区公民館を使わせていただいた。
3. 調査の方法は、第1回植物①、第2回植物②（合計225項目）、第3回動物（合計250項目、※一部海藻類を含む）について、それぞれ2時間程度、調査員が映像や音声（鳴き声等）を示して、方言名や利用方法等を質問し、それに答えてもらうという形式で実施した。
4. 各字ごとの扉裏には、調査実施年月日、話者氏名、出生年等の情報を掲載し、必要に応じて備考欄に経歴等を特記している。
5. 本章の記述は、音声と映像で記録した調査内容を、発音や身振り手振り等も丹念に確認しながら、話者が話した言葉をそのまま文字に起こしたものをバージョン1とし、それら膨大なテキストの中から、発言の大筋を損なわないようにしつつ、バージョン5まで推敲に推敲を重ね、簡潔にまとめたものである。なお、回答のあった項目のみ記述し、回答のなかった項目は削除した。
6. はじめに、暮らしの基本となる〈水の利用〉についてまとめた。また、休憩時間や雑談の中にも貴重なお話が多数あり、それらは調査項目の末尾に〈雑談〉として掲載した。
7. 調査項目の記述は、動植物等の和名〈科名〉・方言名・音声表記・利用方法となっている。方言名が複数出てきた場合は並記している。また、沖縄植物学の先駆的役割を果たした本村出身の天野鉄夫氏の『琉球列島有用樹木誌』（1982年・琉球列島有用樹木誌刊行会）より転載させていただいた方言名については「方言名（天野資料）」とし、『大宜味村史 言語編』からの転載については「方言名（言語編）」とした。
8. 音声表記で使われている「?（声門破裂音）」は、閉じた声門が開放されて起こる破裂音（詰まる音）を表し、琉球語に特徴的な発音であることからあえて表記した。  
例：豚 ?ワー ?wa:（ウワー、ツワー）、鼠 ?エンチュ ?entʃu（ウエンチュ、ツエンチュ）
9. 利用方法の内容は文頭で次のように分類した。

どの項目にも属さないも（話）、環境（環）、生業（生）、衣食住の住（住）、採取（採）、民俗知識（知）、遊び・娯楽（遊）、衣食住の衣（衣）、衣食住の食（食）、人生儀礼・行事（行）、

社会生活（社）、医療（医）、信仰・伝承（信）

例：リュウキュウマツ〈マツ科〉

マチ matʃi、マチギー matʃitgi:

環：薪に使った。／採：田嘉里はウミンチュー（漁師）がいない。夜、海に行くことはあまりなかった。マチンチ（松脂）はとらなかった。／住：生木を建材に使うと白蟻もつかなかった。

10. 調査記録を理解する助けとして、各字の最後には、字誌や関連資料等から引用した字の昔の暮らしが分かるような内容の文章を編集してコラム「〇〇の原風景」として挿入した。

11. 編集にあたっては、以下の参考文献、資料・写真協力の助けを借りた。なお、文献の表記については、本頁のみ別の様式を適用した。

【参考文献】「著者（発行年）『書名・論文名』 発行者． 総頁数）」

- 大宜味村史編集委員会（1978年）『大宜味村史 資料編』大宜味村． 577p  
 大宜味村史編集（1979年）『大宜味村史 通史編』大宜味村． 562p  
 大宜味村史編纂委員会シマジマ専門部会（2016年）『大宜味村史 シマジマ本編』大宜味村役場 373p  
 大宜味村史編纂委員会民俗専門部会（2018年）『大宜味村史 民俗編』大宜味村教育委員会． 817p  
 大宜味村史編纂委員会言語専門部会（2020年）『大宜味村史 言語編』大宜味村教育委員会． 498p  
 大宜味村教育委員会（1984年）『大宜味村文化財報告書第三集 大宜味村の猪垣』大宜味村教育委員会． 46p  
 大宜味村教育委員会（1997年）『大宜味村の自然「普及版」 おおぎみの自然』大宜味村教育委員会． 164p  
 天野鉄夫（1982年）『琉球列島有用樹木誌』琉球列島有用樹木誌刊行会． 255p  
 安里有三（1990年）『田嘉里の歴史』私家版． 309p  
 宮城信八（2000年）『シマフトウバ 大宜味村田嘉里の方言』私家版． 225p  
 新城真恵（1985年）『おきなわ 大宜味村 謝名城の民俗』若夏社． 251p  
 平良豊勝（1970年）『喜如嘉の民俗』私家版． 165p  
 福地廣昭（1983年）『ふあるやま イギミの里・地名考』那覇出版社． 160p  
 喜如嘉誌編集委員会（1996年）『喜如嘉誌』喜如嘉誌刊行会． 738p  
 饒波誌編集委員会（2005年）『大宜味村 饒波誌』大宜味村字饒波． 371p  
 平良泉幸・山川東軒（1991年）『大兼久誌』区長山川保清． 433p  
 宮城長信著・字誌編さん委員会編（2012年）『鎮守の里 大宜味字誌』大宜味村字大宜味区． 326p  
 宮城倉栄（1985年）『根路銘誌』区長大城栄進． 637p  
 高江洲重光（2008年）『わーけーしまむにー ～大宜味 根路銘～』私家版． 234p  
 大宜味村字上原・天作賀会（1997年）『大宜味村上原区制 80 周年・天作賀会設立 50 周年 ふるさとティサガ記念誌』大宜味村字上原・天作賀会． 345 p  
 塩屋誌編集委員会（2003年）『塩屋誌』塩屋区公民館． 407p  
 字誌編纂委員会（2006年）『大保誌 一大保川の流れとともに』大宜味村大保区． 535p  
 津波誌編集委員会（2004年）『大宜味村 津波誌』大宜味村津波区． 399p  
 前田勇善著・大西正幸監修（2004年）『生活分類上から見た津波のシマ言葉』大宜味村津波区． 147p  
 喜如嘉の芭蕉布保存会（2018年）『芭蕉布の今昔』冊子 50p

【資料・写真協力】

沖縄県公文書館 田嘉里区 饒波区 大兼久区 塩屋区 大保区 宮城区 塩屋小学校創立 100 周年記念誌  
 平良ミネ子 平良景昭 平良美恵子 仲井間幸子 前田朝達 平良光秀 友寄景喜 上地里子 宮里恵美子  
 ラブ・オーシュリ 旧喜如嘉小学校

調査項目一覧

水の利用

■ 一般

農作物

イモ（甘藷）

サトウキビ（甘蔗）

大豆

カボチャ（南瓜）

稲

粟

麦

植物総称

動物総称

木

草

ツル性植物

シダ類

キノコ類

カビ類

■ 植物

藻類・シダ類

イシクラゲ〈ネンジュモ科〉

コシダ〈ウラボシ科〉

ナガバカニクサ〈カニクサ科〉

タカワラビ〈タカワラビ科〉

ヒカゲヘゴ〈ヘゴ科〉

リュウキュウイノモトソウ〈イノモトソウ科〉

オオタニワタリ（俗称）〈チャセンシダ科〉

ホシダ〈ヒメシダ科〉

タマシダ〈タマシダ科〉

裸子植物

ソテツ〈ソテツ科〉

リュウキュウマツ〈マツ科〉

イヌマキ〈マキ科〉

被子植物

オオムラサキシキブ〈シソ科〉

センリョウ〈センリョウ科〉

ハスノハギリ〈ハスノハギリ科〉

スナヅル〈クスノキ科〉

クスノキ〈クスノキ科〉

ニッケイ〈クスノキ科〉

ヤブニッケイ〈クスノキ科〉

タブノキ〈クスノキ科〉

単子葉植物

クワズイモ〈サトイモ科〉

リュウキュウハンゲ〈サトイモ科〉

ダイジョ〈ヤマノイモ科〉

アダン〈タコノキ科〉

サツマサンキライ〈サルトリイバラ科〉

テッポウユリ〈ユリ科〉

アキノワスレグサ〈ススキノキ科〉

ノビル〈ヒガンバナ科〉

ハマオモト〈ヒガンバナ科〉

リュウゼツラン〈クサスギカズラ科〉

クサスギカズラ〈クサスギカズラ科〉

クロツグ〈ヤシ科〉

ビロウ〈ヤシ科〉

シュロ〈ヤシ科〉

シマツユクサ〈ツユクサ科〉

イトバショウ〈バショウ科〉

バナナ〈バショウ科〉

アオノクマタケラン〈ショウガ科〉

ゲットウ〈ショウガ科〉

ヒメガマ〈ガマ科〉

シュロガヤツリ〈カヤツリグサ科〉

ハマスゲ〈カヤツリグサ科〉

クロガヤ〈カヤツリグサ科〉

オオアブラガヤ〈カヤツリグサ科〉

トウツルモドキ〈トウツルモドキ科〉

ダンチク〈イネ科〉

ホウライチク〈イネ科〉

ジュズダマ〈イネ科〉

メヒシバ〈イネ科〉

オヒシバ〈イネ科〉

チガヤ〈イネ科〉

ススキ〈イネ科〉

ハイキビ〈イネ科〉

セイコノヨシ〈イネ科〉

ホテイチク〈イネ科〉

大きい竹〈イネ科〉

リュウキュウチク〈イネ科〉

エノコログサ〈イネ科〉

ツキイゲ〈イネ科〉

ネズミノオ〈イネ科〉

クロイワザサ〈イネ科〉

ヨシススキ〈イネ科〉

コウライシバ〈イネ科〉

## 双子葉植物

ハスノハカズラ 〈ツツラフジ科〉  
 リュウキュウボタンヅル 〈キンポウゲ科〉  
 センニンソウ 〈キンポウゲ科〉  
 シマキツネノボタン 〈キンポウゲ科〉  
 イスノキ 〈マンサク科〉  
 エビヅル 〈ブドウ科〉  
 ゴンズイ 〈ミツバウツギ科〉  
 モモタマナ 〈シクンシ科〉  
 バンジロウ 〈フトモモ科〉  
 アデク 〈フトモモ科〉  
 ノボタン 〈ノボタン科〉  
 ソウシジュ 〈マメ科〉  
 デリス 〈マメ科〉  
 メドハギ 〈マメ科〉  
 クロヨナ 〈マメ科〉  
 ウジルカンダ 〈マメ科〉  
 スズメノエンドウ 〈マメ科〉  
 ヤハズエンドウ 〈マメ科〉  
 ヘビイチゴ 〈バラ科〉  
 シャリンバイ 〈バラ科〉  
 リュウキュウイチゴ 〈バラ科〉  
 リュウキュウバライチゴ 〈バラ科〉  
 ナワシロイチゴ 〈バラ科〉  
 ホウロクイチゴ 〈バラ科〉  
 ツルグミ 〈グミ科〉  
 ヒメクマヤナギ 〈クロウメモドキ科〉  
 クロイゲ 〈クロウメモドキ科〉  
 クワノハエノキ 〈アサ科〉  
 ウラジロエノキ 〈アサ科〉  
 ホソバムクイヌビワ 〈クワ科〉  
 イヌビワ 〈クワ科〉  
 ガジュマル 〈クワ科〉  
 オオイタビ 〈クワ科〉  
 アコウ 〈クワ科〉  
 ヒメイタビ 〈クワ科〉  
 ハマイヌビワ 〈クワ科〉  
 シマグワ 〈クワ科〉  
 ノカラムシ 〈イラクサ科〉  
 オキナワズメウリ 〈ウリ科〉  
 イタジイ 〈ブナ科〉  
 マテバシイ 〈ブナ科〉  
 アマミアラカシ 〈ブナ科〉  
 オキナワウラジロガシ 〈ブナ科〉

ヤマモモ 〈ヤマモモ科〉  
 モクマオウ 〈モクマオウ科〉  
 マサキ 〈ニシキギ科〉  
 ハリツルマサキ 〈ニシキギ科〉  
 カタバミ 〈カタバミ科〉  
 ムラサキカタバミ 〈カタバミ科〉  
 コバンモチ 〈ホルトノキ科〉  
 ホルトノキ 〈ホルトノキ科〉  
 トウダイグサ 〈トウダイグサ科〉  
 シマニシキソウ 〈トウダイグサ科〉  
 イワダイゲキ 〈トウダイグサ科〉  
 ハイニシキソウ 〈トウダイグサ科〉  
 オオバギ 〈トウダイグサ科〉  
 アカメガシワ 〈トウダイグサ科〉  
 クスノハガシワ 〈トウダイグサ科〉  
 キャッサバ 〈トウダイグサ科〉  
 ヤンバルアカメガシワ 〈トウダイグサ科〉  
 ヒマ 〈トウダイグサ科〉  
 シマヤマヒハツ 〈ミカンソウ科〉  
 アカギ 〈ミカンソウ科〉  
 オオシマコバンノキ 〈ミカンソウ科〉  
 カキバカンコノキ 〈ミカンソウ科〉  
 テリハボク 〈テリハボク科〉  
 フクギ 〈テリハボク科〉  
 リュウキュウコスミレ 〈スミレ科〉  
 パパイア 〈パパイア科〉  
 ハマダイコン 〈アブラナ科〉  
 ハゼノキ 〈ウルシ科〉  
 クスノハカエデ 〈ムクロジ科〉  
 センダン 〈センダン科〉  
 ヒラミレモン 〈ミカン科〉  
 ゲッキツ 〈ミカン科〉  
 サルカケミカン 〈ミカン科〉  
 ヒレザンショウ 〈ミカン科〉  
 サキシマスオウノキ 〈アオイ科〉  
 ブッソウゲ 〈アオイ科〉  
 オオハマボウ 〈アオイ科〉  
 サキシマハマボウ 〈アオイ科〉  
 イソマツ 〈イソマツ科〉  
 ツルソバ 〈タデ科〉  
 ギシギシ 〈タデ科〉  
 イヌビユ 〈ヒユ科〉  
 スベリヒユ 〈スベリヒユ科〉  
 ツルナ 〈ハマミズナ科〉

調査項目一覧

サガリバナ〈サガリバナ科〉  
 ハマヒサカキ〈モッコク科〉  
 モッコク〈モッコク科〉  
 アカテツ〈アカテツ科〉  
 リュウキュウコクタン〈カキノキ科〉  
 リュウキュウガキ〈カキノキ科〉  
 シナノガキ〈カキノキ科〉  
 トキワガキ〈カキノキ科〉  
 マンリョウ〈サクラソウ科〉  
 シシアクチ〈サクラソウ科〉  
 モクタチバナ〈サクラソウ科〉  
 ルリハコベ〈サクラソウ科〉  
 ハマボッサ〈サクラソウ科〉  
 モロコシソウ〈サクラソウ科〉  
 タイミンタチバナ〈サクラソウ科〉  
 ヤブツバキ〈ツバキ科〉  
 サザンカ〈ツバキ科〉  
 イジュ〈ツバキ科〉  
 ナカハラクロキ〈ハイノキ科〉  
 エゴノキ〈エゴノキ科〉  
 ナシカズラ〈マタタビ科〉  
 ケラマツツジ〈ツツジ科〉  
 サクラマツツジ〈ツツジ科〉  
 ギーマ〈ツツジ科〉  
 ヤエムグラ〈アカネ科〉  
 クチナシ〈アカネ科〉  
 タイワンルリミノキ〈アカネ科〉  
 ヘクソカズラ〈アカネ科〉  
 ナガミボチョウジ〈アカネ科〉  
 シラタマカズラ〈アカネ科〉  
 シマミサオノキ〈アカネ科〉  
 アカミズキ〈アカネ科〉  
 サクララン〈キョウチクトウ科〉  
 リュウキュウテイカカズラ〈キョウチクトウ科〉  
 マルバチシャノキ〈ムラサキ科〉  
 フクマンギ〈ムラサキ科〉  
 モンパノキ〈ムラサキ科〉  
 ダンバイヒルガオ〈ヒルガオ科〉  
 ノアサガオ〈ヒルガオ科〉  
 センナリホオズキ〈ウリ科〉  
 テリミノイヌホオズキ〈ウリ科〉  
 ネズミモチ〈モクセイ科〉  
 オオバコ〈オオバコ科〉  
 ショウロウクサギ〈シソ科〉

タイワンウオクサギ〈シソ科〉  
 ハマゴウ〈シソ科〉  
 ミツバハマゴウ〈シソ科〉  
 リュウキュウアイ〈キツネノマゴ科〉  
 モチノキ〈モチノキ科〉  
 クサトベラ〈クサトベラ科〉  
 ヨモギ〈キク科〉  
 インドヨメナ〈キク科〉  
 センダングサ類〈キク科〉  
 シマアザミ〈キク科〉  
 ベニバナボロギク〈キク科〉  
 ホソバワダン〈キク科〉  
 モクビャッコウ〈キク科〉  
 タカサブロウ〈キク科〉  
 ウスベニニガナ〈キク科〉  
 ツワブキ〈キク科〉  
 スイゼンジナ〈キク科〉  
 アキノノゲシ〈キク科〉  
 ハルノノゲシ〈キク科〉  
 オニタビラコ〈キク科〉  
 ハクサンボク〈レンブクソウ科〉  
 サンゴジュ〈レンブクソウ科〉  
 ゴモジュ〈レンブクソウ科〉  
 タラノキ〈ウコギ科〉  
 カクレミノ〈ウコギ科〉  
 ノチドメ〈ウコギ科〉  
 フカノキ〈ウコギ科〉  
 トベラ〈トベラ科〉  
 ナンゴクハマウド〈セリ科〉  
 マツバゼリ〈セリ科〉  
 ヤブジラミ〈セリ科〉

■ 動物

家 畜

ウサギ  
 イヌ  
 ネコ  
 ウマ  
 ブタ  
 ウシ  
 ヤギ  
 アヒル  
 ニワトリ

哺乳類

ジャコウネズミ〈トガリネズミ科〉

ネズミ〈ネズミ科〉  
 ハツカネズミ〈ネズミ科〉  
 ケナガネズミ〈ネズミ科〉  
 トゲネズミ〈ネズミ科〉  
 オリイオオコウモリ〈オオコウモリ科〉  
 小型コウモリ類  
 リュウキュウイノシシ〈イノシシ科〉

鳥類

キジバト〈ハト科〉  
 ズアカアオバト〈ハト科〉  
 カラスバト〈ハト科〉  
 サギ類〈サギ科〉  
 リュウキュウヨシゴイ〈サギ科〉  
 ゴイサギ〈サギ科〉  
 ヤンバルクイナ〈クイナ科〉  
 パン〈クイナ科〉  
 チドリ類〈チドリ科〉  
 シギ類〈シギ科〉  
 アマミヤマシギ〈シギ科〉  
 ウズラ〈ミフウズラ科〉  
 ミサゴ〈ミサゴ科〉  
 ツミ〈タカ科〉  
 サシバ〈タカ科〉  
 リュウキュウコノハズク〈フクロウ科〉  
 アオバズク〈フクロウ科〉  
 カワセミ〈カワセミ科〉  
 アカショウビン〈カワセミ科〉  
 ノグチゲラ〈キツツキ科〉  
 サンコウチョウ〈カササギヒタキ科〉  
 ハシブトガラス〈カラス科〉  
 シジュウカラ〈シジュウカラ科〉  
 リュウキュウツバメ〈ツバメ科〉  
 ヒヨドリ〈ヒヨドリ科〉  
 ウグイス〈ウグイス科〉  
 メジロ〈メジロ科〉  
 セッカ〈センニュウ科〉  
 ホントウアカヒゲ〈ヒタキ科〉  
 イソヒヨドリ〈ヒタキ科〉  
 スズメ〈スズメ科〉  
 キセキレイ〈セキレイ科〉

爬虫類・両生類

リュウキュウヤマガメ〈イシガメ科〉  
 クロイワトカゲモドキ〈トカゲモドキ科〉  
 ヤモリ類〈ヤモリ科〉

オキナワキノボリトカゲ〈アガマ科〉  
 オキナワトカゲ〈トカゲ科〉  
 バーバートカゲ〈トカゲ科〉  
 ヘリグロヒメトカゲ〈トカゲ科〉  
 アオカナヘビ〈カナヘビ科〉  
 ヘビ類  
 ブラーミニメクラヘビ〈メクラヘビ科〉  
 リュウキュウアオヘビ〈ナミヘビ科〉  
 アカマタ〈ナミヘビ科〉  
 ガラスヒバァ〈ナミヘビ科〉  
 ハイ〈コブラ科〉  
 ハブ〈クサリヘビ科〉  
 ヒメハブ〈クサリヘビ科〉  
 イボイモリ〈イモリ科〉  
 オキナワシリケンイモリ〈イモリ科〉  
 カエル類〈カエル目〉  
 ハロウエルアマガエル〈アマガエル科〉  
 リュウキュウアカガエル〈アカガエル科〉  
 オキナワイシカワガエル〈アカガエル科〉  
 ハナサキガエル〈アカガエル科〉  
 ホルストガエル〈アカガエル科〉  
 ナミエガエル〈ヌマガエル科〉  
 ヌマガエル〈ヌマガエル科〉  
 オキナワアオガエル〈アオガエル科〉  
 ヒメアマガエル〈ヒメアマガエル科〉  
 オタマジャクシ類

昆虫類

トンボ類〈トンボ目〉  
 イトトンボ類〈イトトンボ亜科の小型種〉  
 ヤンマ類〈主にヤンマ科〉  
 カラスヤンマ〈ミナミヤンマ科〉  
 ウスバキトンボ〈トンボ科〉  
 アカトンボ類〈トンボ科〉  
 ナナフシ類〈ナナフシ目〉  
 カマキリ類〈カマキリ目〉  
 ゴキブリ類〈ゴキブリ目〉  
 シロアリ類〈シロアリ目〉  
 コオロギ類〈コオロギ科〉  
 ケラ〈ケラ科〉  
 タイワンクツワムシ〈クツワムシ科〉  
 バッタ類〈バッタ目〉  
 ショウリョウバッタ〈バッタ科〉  
 シラミ類〈ヒトジラミ科〉  
 セミ類〈セミ科〉

調査項目一覧

クロイワニイニイ〈セミ科〉  
クマゼミ〈セミ科〉  
リュウキュウアブラゼミ〈セミ科〉  
オキナワヒメハルゼミ〈セミ科〉  
クロイワツクツク〈セミ科〉  
オオシマゼミ〈セミ科〉  
カメムシ類〈カメムシ下目〉  
アメンボ類〈アメンボ下目〉  
オキナワハンミョウ〈オサムシ科〉  
ゲンゴロウ類〈ゲンゴロウ科〉  
アオドウガネ〈コガネムシ科〉  
ツヤハナムグリ類〈コガネムシ科〉  
ホタル類〈ホタル科〉  
テントウムシ類〈テントウムシ科〉  
カミキリムシ類〈カミキリムシ科〉  
ゾウムシ類〈ゾウムシ科／ゾウムシ上科〉  
ハチ類〈ハチ目〉  
チビアシナガバチ〈アシナガバチ亜科〉  
コガタズズメバチ〈ズズメバチ亜科〉  
ドロバチ類〈ドロバチ亜科〉  
アリ類〈アリ科〉  
ノミ類〈ヒトノミ科〉  
カ類〈カ科〉  
ハエ類〈双翅目（カ科を除く）〉  
オビキンバエ〈クロバエ科〉  
サシバエ類〈イエバエ科〉  
ショウジョウバエ類〈ショウジョウバエ科〉  
チョウ類〈鱗翅目（蝶類）〉  
ガ類〈鱗翅目（蛾類）〉  
青虫〈イモムシ〉  
陸棲無脊椎動物  
クモ類〈真正クモ目〉  
オオジョロウグモ〈ジョロウグモ科〉  
チブサトゲグモ〈コガネグモ科〉  
ナガマルコガネグモ〈コガネグモ科〉  
アシダカグモ類〈アシダカグモ科〉  
オオゲジ〈ゲジ科〉  
オオムカデ類〈オオムカデ目〉  
ヤスデ類〈ヤスデ綱〉  
オカヤドカリ類〈オカヤドカリ科〉  
ヤシガニ〈オカヤドカリ科〉  
ミミズ類  
カタツムリ類  
オキナワウスカワマイマイ〈オナジマイマイ科〉

ヤンバルマイマイ〈オナジマイマイ科〉  
アオミオカタニシ〈ヤマタニシ科〉  
キセルガイ類〈キセルガイ科〉  
アフリカマイマイ〈アフリカマイマイ科〉  
ナメクジ類〈ナメクジ科〉  
陸水棲動物  
ニホンウナギ〈ウナギ科〉  
オオウナギ〈ウナギ科〉  
オオグチユゴイ〈ユゴイ科〉  
フナ〈コイ科〉  
コイ〈コイ科〉  
アユ〈キュウリウオ科〉  
ミナメダカ〈メダカ科〉  
タウナギ〈タウナギ科〉  
タイワンキンギョ〈ゴクラクギョ亜科〉  
ハゼ類〈ハゼ科〉  
カワエビ類〈川にいるエビ類〉  
ヌマエビ類〈ヌマエビ科〉  
オキナワアナジャコ〈オキナワアナジャコ科〉  
カニ類（陸産）  
モクズガニ〈モクズガニ科〉  
オカガニ類〈オカガニ科〉  
サワガニ類〈サワガニ科〉  
ノコギリガサミ〈ワタリガニ科〉  
ミナミベニツケガニ〈ワタリガニ科〉  
シオマネキ類〈スナガニ科〉  
ミナミコメツキガニ〈ミナミコメツキガニ科〉  
ツノメガニ〈スナガニ科〉  
スナガニ〈スナガニ科〉  
カワニナ類〈カワニナ科〉  
タニシ〈タニシ科〉  
海棲生物  
ジュゴン〈ジュゴン科〉  
イルカ類  
クジラ類  
カタクチイワシ類〈ニシン科〉  
キビナゴ〈ニシン科〉  
リュウキュウドロクイ〈ニシン科〉  
クラカケエビス〈イトウダイ科〉  
オニオコゼ〈フサカサゴ科〉  
ミノカサゴ〈フサカサゴ科〉  
ハタ類〈ハタ科〉  
カンモンハタ〈ハタ科〉  
カスマアジ〈アジ科〉

タカサゴ〈タカサゴ科〉  
 ミナミクロダイ〈タイ科〉  
 ヒメジ類〈ヒメジ科〉  
 イソフエフキ〈フエフキダイ科〉  
 ハマフエフキ〈フエフキダイ科〉  
 チョウチョウウオ〈チョウチョウウオ科〉  
 スズメダイ類〈スズメダイ科〉  
 イシガキダイ〈イシダイ科〉  
 イスズミ類〈イスズミ科〉  
 キビレブダイ〈ブダイ科〉  
 ナンヨウブダイ〈ブダイ科〉  
 ハゲブダイ〈ブダイ科〉  
 シロクラベラ〈ベラ科〉  
 アイゴ類〈アイゴ科〉  
 ゴマアイゴ〈アイゴ科〉  
 クロハギ〈ニザダイ科〉  
 クロモンガラ〈モンガラカワハギ科〉  
 モンガラカワハギ〈モンガラカワハギ科〉  
 ハリセンボン類〈ハリセンボン科〉  
 ウニ類  
 シラヒゲウニ〈ラッパウニ科〉  
 ナガウニ〈ナガウニ科〉  
 ガンガゼ〈ガンガゼ科〉  
 ヒトデ類  
 オニヒトデ〈オニヒトデ科〉  
 アオヒトデ〈ホウキボシ科〉  
 コブヒトデ〈コブヒトデ科〉  
 マンジュウヒトデ〈コブヒトデ科〉  
 ナマコ類  
 ニセクロナマコ〈クロナマコ科〉  
 イシナマコ〈クロナマコ科〉  
 ハネジナマコ〈クロナマコ科〉  
 シカクナマコ〈シカクナマコ科〉  
 イセエビ類〈イセエビ科〉  
 ゴウリエビ〈セミエビ科〉  
 イワガニ〈イワガニ科〉  
 オウギガニ〈カノコオウギガニ科〉  
 ソデカラッパ〈カラッパ科〉  
 タイワンガサミ〈ワタリガニ科〉  
 ミナミベニツケガニ〈ワタリガニ科〉  
 ヒザラガイ〈クサズリガイ科〉  
 ベッコウガサ〈ヨメガカサ科〉  
 ミミガイ〈ミミガイ科〉  
 サラサバテイ〈ニシキウズガイ科〉

カンギク〈ニシキウズガイ科〉  
 チョウセンサザエ〈リュウテン科〉  
 ヤコウガイ〈リュウテン科〉  
 アマオブネ類〈アマオブネガイ科〉  
 リュウキュウウミニナ〈ウミニナ科〉  
 ゴマフニナ〈ゴマフニナ科〉  
 タカラガイ類〈タカラガイ科〉  
 キイロタカラガイ〈タカラガイ科〉  
 ハナマルユキダカラ〈タカラガイ科〉  
 ハチジョウダカラ〈タカラガイ科〉  
 マガキガイ〈ソデボラ科〉  
 スイジガイ〈ソデボラ科〉  
 クモガイ〈ソデボラ科〉  
 ホラガイ〈フジツガイ科〉  
 ツノテツレイシガイ〈アクキガイ科〉  
 イトマキボラ〈アクキガイ科〉  
 クロフモドキ〈イモガイ科〉  
 イソアワモチ〈イソアワモチ科〉  
 貝類  
 オハグログキ〈イタボガキ科〉  
 リュウキュウサルボウ〈フネガイ科〉  
 カワラガイ〈ザルガイ科〉  
 リュウキュウザルガイ〈ザルガイ科〉  
 シャコガイ類〈シャコガイ科〉  
 イソハマグリ〈チドリマスオガイ科〉  
 リュウキュウマスオガイ〈シオサザナミ科〉  
 アラスジケマン〈マルスダレガイ科〉  
 タコ類  
 ウデナガカクレダコ〈マダコ科〉  
 シマダコ〈マダコ科〉  
 ワモンダコ〈マダコ科〉  
 イカ類  
 シロイカ〈ヤリイカ科〉  
 コブシメ〈コウイカ科〉  
 イバラノリ〈イバラノリ科〉  
 マクリ（海人草）〈フジマツモ科〉  
 ヒトエグサ〈ヒトエグサ科〉  
 ホンダワラ類〈ホンダワラ科〉  
 オキナワモズク〈モズク科〉

■表記のための仮名遣いの表

ア	イ	ウ	エ	オ	ヤ	ユ	ワ	ヱ	
[ʔa]	[ʔi]	[ʔu]	[ʔe]	[ʔo]	[ʔja]	[ʔju]	[ʔwa]	[ʔwe]	
ア	イ	ウ	エ	オ	ヤ	ユ	ヨ	ワ	ヱ
[ha]	[ji]	[wu]	[je]	[wo]	[ja]	[ju]	[jo]	[wa]	[we]
カ	キ	ク	ケ	コ			クワ	クヱ	
[ka]	[ki]	[ku]	[ke]	[ko]			[kwa]	[kwe]	
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ			グァ	グヱ	
[ga]	[gi]	[gu]	[ge]	[go]			[gwa]	[gwe]	
サ	シ	ス	セ	ソ					
[sa]	[ʃi]	[su]	[se]	[so]					
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ					
[dza ~ za] [dʒi ~ ʒi] [dzu ~ zu] [dze ~ ze] [dzo ~ zo]									
タ	ティ	トゥ	テ	ト					
[ta]	[ti]	[tu]	[te]	[to]					
ダ	ディ	ドゥ	デ	ド					
[da]	[di]	[du]	[de]	[do]					
ツア	チ	ツ	ツエ	ツォ	チャ		チョ		
[tsa]	[tʃi]	[tzu]	[tse]	[tzo]	[tʃa]		[tʃo]		
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ					
[na]	[ni]	[nu]	[ne]	[no]					
ハ	ヒ		ヘ	ホ	ヒャ				
[ha]	[hi ~ ci]		[he]	[ho]	[hja]				
ファ	フィ	フ	フェ	フォ					
[ʃa]	[ʃi]	[ʃu]	[ʃe]	[ʃo]					
パ	ピ	プ	ペ	ポ	ピャ				
[pa]	[pi]	[pu]	[pe]	[po]	[pja]				
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビャ				
[ba]	[bi]	[bu]	[be]	[bo]	[bja]				
マ	ミ	ム	メ	モ					
[ma]	[mi]	[mu]	[me]	[mo]					
ラ	リ	ル	レ	ロ					
[ra]	[ri]	[ru]	[re]	[ro]					
促音	ッ	撥音	[mnŋ]	ン	長音	:			

**〈水の利用〉**

食：昔は生活用水は各班にチンガー（深井戸）があり、戦前は7か所ぐらいあった井戸からバケツで運んだり、一斗缶に紐をつけて天秤棒で担ぐこともあった。井戸のないところは川から汲んでいた。各家庭に口の広い大きなファンドゥー（水甕<sup>みずがめ</sup>）が置かれてあり、それに運んだ水を溜めていた。何回も水を汲んで運んだが、ほとんど家から近かったので、こぼれないように木の葉などを被せたりすることはなかった。天水取りはこの集落では見たことがない。上の森からいっぱい水が湧いてくるので、雨水を溜める必要はなかった。

信：親田パール（班）は今でも元旦に7か所の井戸を回って御願をして、井戸から若水を汲んでいる。今は、井戸は台風などで埋まって、昔の形が残っているだけでほとんど水はない。地形が昔と変わっている。昔はここはみんな水田だったが、土地改良で地盤が2mぐらい下がったので、井戸に水が溜まらなくなった。前はウナギも入ってきた。

## 一般

**農作物**

チュクイ tʃukui

**イモ（甘藷）**

ヤムン jamun

**サトウキビ（甘蔗）**

?ウギ ?ugi

**大豆**

トーフマミ to:ɸumami

**カボチャ（南瓜）**

ナンクワン naŋkwan

**稲**

ネー ne:

**粟**

?アワ ?awa

**植物総称** —

話：別々にヒー（木）とクサ（草）と言う。

**動物総称**

?イクムシ ?ikimufi

**木**

ヒー hi:

**草**

クサ kusa

**ツル性植物**

ハンザ handza

話：芋の蔓にはカンダとかカンダバーと言うが、木に巻きついたりする蔓<sup>つる</sup>にはハンザと言う。

**キノコ類**

ナバ naba

食：アサグルナバ、ミミグイ（キクラゲ）を食べた。美味しかった。

知：ナバの種類はシイタケ、チリナバ、アカナバ、マチナバ、アサグルナバがあった。アサグルナバはアサグル（フカノキ）に付き、チリナバは白い色をしている。あちこちに散って生えていたのでチリナバと言った。

生：戦前戦後は山から出す建築材の8割はシージャ（イタジイ）だったので、切ったシージャが枯れて腐れかけたのにシイタケが生えてきた。

社：戦前に7、8軒の家族全員がナバで中毒したことがあった。中毒を起こしたナバの名前は分からない。

**カビ類**

ホージ ho:dʒi

植物

藻類・シダ類

イシクラゲ〈ネンジュモ科〉

ファルアーサ ɸarua:sa、ハタキアーサ hatakja:sa

話：ファル（畑）のアーサ（ヒトエグサ）。

環：昔は国頭村鏡地にしか生えていなかったの、わざわざ採りに行った。戦後になってからこの辺りにも生えるようになったが、それは、国場組の採石場（国頭村半地）からあちこちに砂利を運んだから各地に広がったものだ。

食：料理の方法は干したものを茹でて、きれいに洗ってイリチャー（炒め煮）にした。今は除草剤を使うので食べられない。

コシダ〈ウラジロ科〉

ワラビ warabi

住：ワラビゾーキ（コシダの籠）を作った。川に2日ぐらい浸けておくと粘りが出て折れにくくなる。

ヒカゲヘゴ〈ヘゴ科〉

フィグ ɸigu

食：ゼンマイみたいにくるくる巻いた新芽は、皮をむいて茹でて食べた。とても美味しかった。

生：昔は堅くなった幹を山羊小屋の囲いに使っていた。

オオタニワタリ〈チャセンシダ科〉 —

環：沢山あった。

ホシダ〈ヒメシダ科〉 —

生：山羊の餌にした。

タマシダ〈タマシダ科〉

フガニヤマンクワ ɸuganijamaŋkwa

フガニグサ ɸuganigusa

話：下に実がなるからフガニヤマンクワと言った。

食：実は食べていない。

生：葉を動物の餌として使うぐらいしか利用していない。

遊：子供の頃、実を使ってままごとをして遊んだ。

裸子植物

ソテツ〈ソテツ科〉

ストウチ sututʃi

食：あまり食べていない人もいれば、カヘーラニーと言って戦争中に沢山食べている人もいる。／実はそんなに毒は多くない。半分に割って干して澱粉をとった。幹の部分は削ってカラカラになるまで干して川にさらし、カビが生えるぐらいになったら茹でて食べた。

住：葉を3枚ぐらい重ねて箒を作った。

生：葉は緑肥には使っていない。／蘇鉄の葉を被せて苗を保護するような使い方はしていない。

遊：実の回りがある綿みたいなものを糸で巻いて毬を作った。毬を作るときに使う糸はアラウー（荒いウー・織りには使えない芭蕉の繊維）を使った。「那覇の毬はきれいだけどあまり弾まない、山原の毬は見た目は悪いけどよく弾む」と年寄り達が歌を歌っていた。／葉で虫籠を作った。

行：昔は豊年踊りのときに蘇鉄の葉で舞台を飾った。また、トーカチユーエー（米寿祝）などの大きいお祝いには、蘇鉄の葉できれいに門を作ってお祝いをした。

リュウキュウマツ〈マツ科〉

マチ matʃi、マチギー matʃitgi:

環：薪に使った。

採：田嘉里はウミンチュー（漁師）がいない。夜、海に行くことはあまりなかったので、マチンチ（松脂）はとらなかった。

住：生木を建材に使うと白蟻もつかなかった。製材させて床板に使ったりした。

生：自分達の時代に臼は作っていないが、先輩方が作った臼が家にあった。／両手を交互に前後

に動かして粉を米にする松で作られたメーピキウス(米挽き臼)があった。／松の木を縦に割って中を三角に削り溝をつけたティー(樋)で畑や田んぼに水を流した。

信：昔、山奥のクマーリという所から屋嘉比の方まで飲み水をたった一人で引いてきたという伝承がある。距離は相当長くて1 km 以上ある。(『球陽卷十三』尚敬王二十二年条「屋嘉比邑耕作当宮城新造其井水の条」)。

### イヌマキ <マキ科>

チャーギ tʃa:gi

環：この木は山に沢山はない。昔は植林していたのではないかと思う。

住：建材として床柱や軒下のファヤ(柱)に使っていた。

生：山から切り出したのを、公園で検品したらすぐ現金収入になった。昔は田んぼや畑をやりながら、ほとんど山稼ぎで生活していた。

被子植物

### センリョウ <センリョウ科> —

話：田嘉里ではセンリョー、マンリョーとは呼ばない。

環：山に生えるので名前が付くほど馴染みがない。

知：アクチの葉と似ているが実が違う。

### クスノキ <クスノキ科>

クスヌキ kusunuki

住：虫も食わない、とても強い木なので建築材に使っていた。箆笥たんすを作るのにも使っていた。

知：台湾から入ってきた木。

生：樟脳は謝名城で製造していた。ずっと昔は田嘉里でも4名ぐらの組合でやっていたようだ。病院の薬に使うということで、一斗缶に密封して本土向けに山原船で運んだそうだ。

### ニッケイ <クスノキ科>

カラギ karagi

食：沢山食べた。乾燥させたのを酒に漬けてカラ

ギ酒も作った。葉を乾燥させてお茶にできる。皮も乾燥させて粉にしているんなのに使える。ヒゲ(根)のほうが辛くて美味しい。

### ヤブニッケイ <クスノキ科>

ジクミ dzikumi

環：薪としても使った。

食：ジクミンナイ(ヤブニッケイの実)を煎って食べた。

### タブノキ <クスノキ科>

トーウルシ to:uruʃi (言語編)

単子葉植物

### クワズイモ <サトイモ科>

?ウバシ ?ubaʃi

知：触ると痒いから使いみちがなかった。

### ダイジョ <ヤマノイモ科>

マーヤムン ma:jamun

食：今でも食べている。

知：赤マーヤムンとか白マーヤムンとか種類が3、4つもある。

行：正月やジューロクニチー(1月16日の墓参)などの行事のときにも使う。

### アダン <タコノキ科>

?アラリ ?arari

?アラリンバー(葉) ?ararimba:

?アラリンナイ(実) ?ararinnai

環：田嘉里は海から遠いのでアダンは身近にない。／焚きつけには稲刈り後の藁を使っていた。

食：子供の頃、赤く熟した実を口に入れて吸ってみたら少し甘みがあった。

知：葉で風車を作ったり、何か編んだりした(※何を編んだかは不明)。

生：気根を裂いて縄を絞ったものは強いので特別の場合に使った。戦前は田んぼが多かったので、縄を絞うのも稲藁が主流だった。

行：アダンの実をお盆に供えることはなかった。

**サツマサンキライ** 〈サルトリイバラ科〉 —

環：あることは分かるが、特に使っていない。

**テッポウユリ** 〈ユリ科〉

ユンゴーレー jungo:re:

食：球根を食べることはしない。

**アキノワスレグサ** 〈ススキノキ科〉

グワンソー gwanso:

食：花を食べた。

医：全草を乾燥させて安眠剤にする。お茶にしたものを眠れないという人に分けてあげたらぐっすり眠れたという。

**ノビル** 〈ヒガンバナ科〉

ハルビーヤ harubi:ja

話：ハル（畑）のビーヤ。

環：昔は畑に沢山あったが今はない。

**ハマオモト** 〈ヒガンバナ科〉

ピルグサ pirugusa、ピルグサー pirugusa:

環：海の近くに生えるが、庭に植えているところもあった。

医：皮を剥いでオデキに貼った。

**リュウゼツラン** 〈クサスギカズラ科〉

トウンバン tumbaN（言語編）

**クロツグ** 〈ヤシ科〉

マンギ mangi、マンニ manni

環：田嘉里にはあまりないので使っていない。

知：この木の下にハブがよくいるので注意しないと大変だった。

行：行事のときに使うようなこともなかった。

**ビロウ** 〈ヤシ科〉

クバ kuba

環：畑の側に植えていた。

衣：クバ笠、扇、蓑などを作った。

食：井戸の釣瓶の綱を作っている人もいた。

**シュロ** 〈ヤシ科〉

チグ tfigu

環：縄を編んでモッコなどを作るために、畑の側に植えていた。シュロの皮はスルガーといい、スルガーで作った縄はスルガーヅナ（シュロ綱）という。／今でも田嘉里のどこかにチグが生えていると思う。昔は山の上はみんな段畑でチグがいっぱい植えられていた。

衣：雨に強いのでインヌ（蓑）、笠などを作った。カシギンナ（担ぎ縄）も作った。

住：スルガーで箒を作った。父が作ったスルガーボーキがまだ残っている。

生：牛の鼻から通す鼻綱としても使った。／藁縄もあったかもしれないが、昔は縄といったらスルガーが多かった。スルガーのモッコは4、5年経ってもなかなか腐れず丈夫だった。

**シマツユクサ** 〈ツユクサ科〉

スガリグサ sugarigusa

知：とても厄介な草で、刈って捨て置いたところからすぐまた生えてくる。

**イトバショウ** 〈バショウ科〉

?ウー ?u:

環：昔はどこの家の庭にも植えられていた。屋敷内にある芭蕉畑にウーバタキと言う。

衣：雨降りの登校時に葉を傘代わりにした。

食：幹の芯を食べた。美味しかった。／昔は山へ行くときの昼食も、運動会の弁当も芭蕉の葉で包んだ。

生：タントウイ（立秋の頃に行われる種おろしの農耕行事）のときに、稲の種を蒔いたら、苗代の周囲に竹を立てて芭蕉の皮を挟み鳥よけにした。／芭蕉布の糸をとるのは幹の外側から順番に剥いていく。／葉を牛の餌にした。

行：アブシバレー（畦払い：旧暦4月に行われる農耕儀礼）のとき芭蕉の葉は使わなかった。

医：この辺りでは病院はないので、子供が熱を出したときに幹を小さく切って体を拭いたり、幹を叩いてうなじに氷枕みたいに当てて冷やしたりした。戦後までやっていた。／ブーブー（瀉血）もやった。背中や額をカミソリで切って血を出しコップなどに受けた。ほとんどみんな自分達の家で、年寄りがやった。

#### 芭蕉布の着物（?ウバサギン ?ubasagiN）

衣：ウバサギンはアブシバレーが終わってから着けないと叱られた。アブシバレー以降を夏とし、ウバサギンは夏物の衣服という認識があった。ウバサギンの洗濯はユナジ（芋や米の汁を発酵させたもの）で洗った。また、シークワサーで洗うときもあった。

行：アブシバレーのときに子供に虫下しを飲ませるような慣習はなかった。

#### バナナ <バショウ科>

バサナイ basanai

食：バサナイの葉は大きくて使いづらいので、何かを包むのはバショウの葉を使うことが多かった。

#### アオノクマタケラン <ショウガ科>

?ウニムッチーバー ?unimuttji:ba:

食：月桃と同じく?ウニムッチーバーと言う。里に月桃が少ないときは、山からクマタケランをとってきて使った。

知：月桃は葉っぱが厚くてすぐ裂けるが、クマタケランは葉が柔らかくて使いやすい。

#### ゲットウ <ショウガ科>

?ウニムッチーバー ?unimuttji:ba:

環：昔からあった。周囲に生えているから手に入りやすい。

食：ムーチー（鬼餅）のときは主にこれを使う。匂いも良い。

#### ハマスゲ <カヤツリグサ科>

ホーブシ ho:bufi、ホーブシグサ ho:bufigusa

#### クロガヤ <カヤツリグサ科>

シギ figi

知：使いみちはない。

#### オオアブラガヤ <カヤツリグサ科> —

知：葉にギザギザがあり、手で触れたら切れる。

食：実を食べたことはない。

#### トウツルモドキ <トウツルモドキ科>

トウダキ tu:daki

知：あまり利用していない。籠も作っていない。

#### ダンチク <イネ科>

デーク de:ku

知：使いみちはない。

信：葬式で魔除けとして使うことはない。

#### ホウライチク <イネ科>

?インザタキ ?indzatak

環：川の堤防や山の中にも生えていた。

住：ソーキやバーキ（箆や籠）を作る材料。うちに父が作ったソーキが沢山ある。

遊：子供の頃に水鉄砲や紙鉄砲を作って遊んだ。紙鉄砲の弾は紙を濡らして丸めたものやアクチ（シシアクチ）の実を使った。

#### ジュズダマ <イネ科>

シシダマ jifidama

遊：昔は糸に抜いて首飾りにしたり、お手玉を作ったりした。シシダマウッチェーという遊びがあった。

医：薬草としては使っていない。

#### メヒシバ <イネ科>

ガンナ ganna、ガンナグサ gannagusa

生：山羊の餌に使った。

医：軸を使って目に入ったゴミを取るという話は聞いたことがない。

#### オヒシバ <イネ科>

?ウシムンドー ?ufimundo:

生：牛や馬の餌に使っていた。

遊：子供達がウシムンドーオーラセーといって、オヒシバを引っかけて引っ張り合って遊んだ。

行：田嘉里ではナーヂキー（新生児の命名儀式）には使っていない。ナーヂキーの儀式では赤子の上から蟹を這わせたという。

### チガヤ <イネ科>

マカヤ makaja

食：根っこは食べられる。子供の頃、根っこの皮をむいて食べたら甘かった。／竹を裂いてピギ（ささくれ）を取ったものでチガヤをくるくる巻いてナビンフタ（鍋の蓋）を作った。

住：茅葺き屋根を葺くとき、てっぺんにはマカヤを置いて山竹を編んだ物を被せて見栄えをよくした。あまり長持ちはしないので、傷んだらその度にてっぺんの部分だけ造り替えた。

生：チガヤで作った鍋の蓋をシンメーナービ（主に芋を炊く底の丸い大鍋）の蓋にして芋を煮た。牛の餌や畜舎の敷草にして堆肥を作った。

### ススキ <イネ科>

モーレー mo:re:, ジジキ dzidziki（言語編）

話：小さいのも大きいのも同じ呼び方をする。

住：箒を作った。

生：牛の餌にしたり大きくなったものはタンブー（炭俵）を作った。タンブーは竹を割って作ることもあった。／薪を束ねるロープ代わりに使った。

信：魔除けのシバ（サン）の結び方は特に決まっていない。1本ずつ結んだものを使う。シバサシのときは桑は使わずススキのシバだけを門の両側に挿す。屋敷の四隅や軒下には挿さない。このとき屋敷の御願も一緒に行なう。

### ハイキビ <イネ科>

ナザキ nadzaki

知：何も使わない。厄介者の雑草。

### ホテイチク <イネ科>

チンブクラキ tjimbukuraki

チンブーラキ tjimbu:raki

チンブクダキ tjimbukudaki

チンブーダキ tjimbu:daki

住：大きくなったものは物干し竿に使っていた。

遊：釣り竿に使った。

行：正月の門松には、松とホテイチクを使った。

### 大きい竹 <イネ科>

マティク matiku

住：戦前から物干竿に使っていた。

行：豊年踊りの舞台の屋根を葺くのに使った。

社：昔は軍隊の旗を揚げるのに使ったり、竹槍も作った。

### リュウキュウチク <イネ科>

ヤマハヤ jamahaja

話：小さいのも大きいのも同じ呼び方をする。／茅を刈りに行くのを「ハヤ、カジカイ（茅を刈ってこようね）」と言った。

住：小さいものは茅葺きの材料。大きくなったものは瓦の下組みに使う。／山の竹で箒を作った。

生：イク（モッコク）などの重い木は男性が担いで運び、ヤマハヤは女性が背負って運んだ。大体30cmぐらいに束ねた物を2つ、長さは6尺（約1.8m）くらいあった。

### 網代編み（チヌブ tjinubu、?アンヌミ ?annumi）

住：ヤマハヤでチヌブ（細かく編んだ網代）やアンヌミ（粗く編んだ網代）を作った。自分達の時代は、チヌブを壁に使うことはなく、チヌブは外の門や屋敷囲いに使っていた。アンヌミもハキ（垣）に使っていた。／昔はチヌブでヒンプンを作ることもあった。そのとき、ヘゴをヒンプンの柱に使ったりした。腐れにくいから適していた。

### ネズミノオ <イネ科>

ゲージ ge:dzi

遊：先の方にバツタやカエルをくくって、蟹の穴

に入れて蟹をユグ（誘う）のに使った。マー  
ガイ（モクズガニ）という毛があるカニを捕ま  
えた。

## 双子葉植物

**イスノキ** 〈マンサク科〉

ユスギ jusugi

話：ユスギなどの堅い木でアジム（杵）を作った。

環：自然に生えているものを利用し、特に植林な  
どはしていない。

住：堅くて強いので建築材に使った。

生：山から伐り出して売っていた。

**エビヅル** 〈ブドウ科〉 —

話：田嘉里ではヤマブドウとは言わない。

食：熟した実はブドウに似ていて美味しい。

医：茎を切ったときに出る汁を、目薬代わりに使っ  
たことはない。

**ゴンズイ** 〈ミツバウツギ科〉

ミーファンカ mi:ɸaŋka

話：実には方言でミーファッキンナイという。

知：使いみちはなかった。

信：神事に使う草の冠をハブミと言うが、ハブミ  
にも使っていない。

**モモタマナ** 〈シクンシ科〉

クワーディーサー kwa:di:sa:

クワーデーサー kwa:de:sa:

環：屋敷には植えない。墓によく植えている。

**バンジロウ** 〈フトモモ科〉

バンシルー banʃiru:

食：熟した実を食べた。

行：お盆に供えるような習慣はない。

**アデク** 〈フトモモ科〉

?アリク ?ariku

生：鍬の柄に使った。

**ノボタン** 〈ノボタン科〉

パンキク paŋkiku、ファンキク ɸaŋkiku

食：熟した実は美味しい。

**ソウシジュ** 〈マメ科〉

ソーシズ so:ʃidzu

生：葉を畑や田んぼの緑肥にした。

**デリス** 〈マメ科〉

デレス deresu

採：戦後はこれを使って海でササ（魚毒漁）をした。

塩分のあるところでは効果があった。量を多く  
して川でも使ったが、効果がなかったので使わ  
なくなった。

**メドハギ** 〈マメ科〉

ファギ ɸagi

行：昔はお盆に供えたが、今はしない。

**ウジルカンダ** 〈マメ科〉

?ウズルハンザ ?udzuruhandza

環：田嘉里にいっぱいあった。ウズルハンザクブ  
という地名もあった。

知：田嘉里では使っていない。

行：綱引きに使うために、その時期になると奥間  
方面から馬車で田嘉里に取りに来ていた。

**スズメノエンドウ** 〈マメ科〉 —

話：ワークワーマミとか言っていたと思うが、こ  
の植物のことか分からない。

知：とても小さな豆がついた。

**ヤハズエンドウ** 〈マメ科〉

ガラシマミ garaʃimami

食：戦前の何もない時期に、あの小さい実を蒸し  
て食べたことがある。

**シャリンバイ** 〈バラ科〉

テーチ te:tʃi

環：テーチは重いので、薪としてはあまり取らな

かった。

衣：家で祖父母がテーチを炊いて染料をとる作業をやっていた。山の中でやっている人はいなかった。

食：熟した実を食べた。

生：大島紬に使うテーチの木を、奄美大島に送るために10t車で運んでいた。大島から田嘉里に買い付け人が来ていた。

行：薪はいっぱいあったので、産室のジール（地炉）で腰を温めるために使う薪として、特にテーチを選んで使うようなことはなかった。

#### リュウキュウイチゴ 〈バラ科〉

ナスナスイッチビ nasunasuittfibi

食：黄色い苺。食べた。

#### リュウキュウバライチゴ 〈バラ科〉

?イッチビ ?ittfibi

話：方言で苺全般にイッチビと言う。

食：美味しい。

#### ナワシロイチゴ 〈バラ科〉

?イッチビ ?ittfibi

#### ハウロクイチゴ 〈バラ科〉

?ウフバーイッチビ ?uφuba:ittfibi

食：食べた。

#### ツルグミ 〈グミ科〉

クビ kubi

環：山に沢山あった。

食：熟した実は美味しかった。

信：親からクビの実がなる所はハブが多いから行くと言われた。山で実がついている木の下には、実を食べに来た鳥を狙ってハブが来るから気をつけなさいという戒めがあった。

#### ヒメクマヤナギ 〈クロウメモドキ科〉

?インギマ ?ijigima

環：今はもうない。

食：熟した実は美味しい。

知：目に良い。

#### ウラジロエノキ 〈アサ科〉

フンギ φungi (言語編)

#### ホソバムクイヌビワ 〈クワ科〉

ファチコーギ φatfiko:gi

話：触ったら痒くなるのでファチコーギと言うのだろう。

住：大きなものは床板に使っていた。

生：葉は田んぼの緑肥に使った。

#### イヌビワ 〈クワ科〉

ミンチャン mintʃaŋ

ミンチャンバー mintʃamba:

話：(※イタビにもミンチャンと言っている)。

食：実は食べられるというが、田嘉里ではあまり食べなかった。

生：山羊や牛の餌にした

#### ガジマル 〈クワ科〉

ガジマル gadzimarū

環：田嘉里にはない。薪には使っていない。

知：痒くなるので使わなかった。使いみちがない。

知：木が曲がっているので、斧で割ることができない。

遊：子供の頃、チューインガム、消しゴム、トリモチなど作ったことはない。

#### オオイタビ 〈クワ科〉

?ウシミンチャン ?uʃimintʃaŋ

食：実は紫に熟したら美味しい。良い香りがする。

知：実も葉も大きい。

#### アコウ 〈クワ科〉

?アホー ?aho:、?アホーギー ?aho:gi:

環：薪にした。薪以外の使いみちがない。

#### ヒメイタビ 〈クワ科〉

ミンチャン mintʃaŋ

話：オオイタビは大きいのでウシミンチャン、ヒ  
メイタビは小さいのでミンチャンと言う。

環：ブロック塀などによく這っている。

### シマグワ 〈クワ科〉

クワーギ kwa:gi

話：実は方言でクワーギンナイと言う。

食：熟した実を食べた。葉は食べていない。

生：葉は山羊の餌にした。山羊がよく食べる。/  
昔この辺りは養蚕が盛んであちこちに桑畑が  
あった。

信：雷が鳴ったら、「クワーギンサードー、ヤナ  
ギンサードー（桑の木の下だよ、柳の木の下だ  
よ）」と唱えてやり過ごした。

### ノカラムシ 〈イラクサ科〉

?ウバー ?ube:

知：山羊の餌以外の使いみちは知らない。

生：山羊の餌には一番最適。

### オキナワズメウリ 〈ウリ科〉

パブンナイ pabunnai、ファブンナイ ʃabunnai

ハブンナイ habunnai

話：ハブの実という意味。

### イタジイ 〈ブナ科〉

シーギ ʃi:gi、シージャ ʃi:dʒa

話：実は方言でシーナイ ʃi:nai と言う。

**薪**（タムン tamuN（自家用）、メーギ me:gi（販  
売用））

環：販売用はほとんどがイタジイだった。戦時  
中は山も管理されなくなり自分勝手に伐採出来  
たので山は荒れた。

住：終戦直後に家を造るときは、製材所もないの  
で斧である程度整えて運んできた（※埋めたり  
浸けたりしたことと言及がないのは、終戦直  
後はそんな余裕はなく山から降ろしてすぐ使っ  
た様子が記憶に強く刻まれているためと思われ  
る）。

生：ある程度大きい木を割ったものでないと、メー  
ギとして売ることはできなかった。メーギや資  
材をスンバルハンファタ（屋号）のカタロンケー  
（嘉太郎さん）が買い取って商売をしていた。  
メーギは長さ 30～40cmに揃え、インザタキ（ホ  
ウライチク）を割いたものできれいに束ね、浜  
辺の集積所に持って行き山原船に積んだ（モッ  
コクの項では公園が集積場になっていたとある  
が、時代が違うと思われる）。メーギは、川の  
堤防に生えているヤマダキできれいに束ね、事  
務所（公民館）の近くで販売することもあった。  
出荷用の薪の集積所は広場になっていて、出荷  
所と呼ばれていた。昔は山で木を切って割って  
束ね、男性は馬で、女性は人力で担いで運ん  
だ。／戦前、山原船は田嘉里川までは上って来  
なかった。／戦前は馬が 70 頭ぐらいいた。親  
達は防衛隊に引っ張られ、あとは子供達が馬を  
使っていた。／販売用の薪は主に青年達がやっ  
ていた。／（男性 1）戦前から 70 年ぐらい林  
業をしている。木を切るのも、斧、鋸、チェン  
ソーと時代と共に山の仕事が変わっていった。

信：小学 4、5 年生のとき、本当は山まで行って  
薪を取らないといけませんが、近いからと謝名城  
のウガンジュ（拝所・根謝銘グスク）から木を  
切った。かぶれるとは知らずに、軽いからファ  
ジギー（ハゼノキ）を切り、同級生の一人がひ  
どくかぶれて苦しんでいたら、上級生に「神様  
の罰だ」と脅された。みんなでお詫びの拝みを  
しに行き、ようやく元気になった。

社：学校で使う薪を納めるために、自分で刀で  
30～40cmに切って、背負えるだけ背負って運  
び、運動場に積んでおいた。／小学 4 年生から  
学校の山入りで薪取りがあった。その薪を売っ  
て学校の経費にした。／戦争中は各家庭に月に  
何束と薪の供出割り当てがあり、学校を休んで  
薪取りをした。／田嘉里に歩兵部隊が 300 人  
ぐらい駐屯していた。山で木炭を焼く木炭部隊  
と、南部に防空壕を造るための大きな松、飛行  
場で使うための木を切り出す部隊があり、船で  
那覇方面に運んで行くようであった。

## 大宜味村史編纂委員会

[編纂委員長]	米須 邦雄（平成27年～令和3年） 仲原 弘哲（令和4年～）	大宜味村教育委員会 教育長 元今帰仁村歴史文化センター館長
[副委員長]	前田 國男	大宜味村文化財保護審議会 会長
[委員]	新城 和治（令和3年～）	元琉球大学教授
[委員]	当山 昌直	沖縄大学地域研究所特別研究員
[委員]	安座間 安史	琉球大学非常勤講師
[委員]	平良 次子	南風原文化センター館長
[委員]	安良城 米子（平成27年～令和3年）	元沖縄国際大学非常勤講師

## 人と自然編専門部会

[部会長]	当山 昌直	沖縄大学地域研究所特別研究員
[副部会長]	安座間 安史	琉球大学非常勤講師
[委員]	米須 邦雄	大宜味村教育委員会 教育長
[委員]	新城 和治	元琉球大学教授
[委員]	與儀 春樹	元県立辺土名高等学校教諭
[委員]	島袋 徳正	大宜味村文化財保護審議会 委員

## 事務局（大宜味村教育委員会）

[教育課長]	宮城 豊
[村史編纂係長]	藤田 元也（平成30年度） 宮城 光一（平成31年度～）
[会計年度任用職員]	新城 喜代美、河津 多恵子

### 大宜味村史『人と自然編』

発行日 2022（令和4）年3月  
編集 大宜味村史編纂委員会  
人と自然編専門部会  
〒905-1306 沖縄県国頭郡大宜味村字大宜味1番地  
TEL：0980-44-3009  
発行 大宜味村教育委員会  
印刷（有）ドリーム印刷  
〒901-0314 沖縄県糸満市字座波1065  
TEL：098-995-1287